荒木光太郎文書 726

荒木

25日迄に意見賜り度

第四部第二章

九州及朝鮮東の防衛

起草者（主）藤原

（副）千早

（昭和二十二年一月二十日）

荒木光太郎文書 726

◎引用資料目次

一、大本營陸軍統帥記錄
二、本土作戰記錄（第一總軍）
三、同　（第二總軍）
四、本土航空作戰記錄（航空總軍）
五、大東亞戰爭史概見表
六、第五航空艦隊作戰記錄
七、大本營海軍部命令（指示）綴
八、暴擊調査團に對する第一復員省及第二復員省の回答
九、陸軍戰鬪序列
十、海軍戰時編制
十一、國土決戰教令（大本營陸軍部發行）
十二、上陸防禦教令（同）
十三、海軍陣地の攻擊（大本營陸軍部發行）
十四、國民抗戰必携（同）
十五、本土決戰々法早ばかり（同）

◎資料提供者

一、大本營陸軍部參謀
　永長　河邊中佐　原　中佐　村田中佐　倉田少佐
　作戰　杉田大佐
　情報　有末中將　吉川少佐　菊　少佐
二、大本營海軍部參謀　大前大佐　大井大佐
三、第二總軍參謀　橋本中佐
四、第一總軍參謀　卒田少佐

荒木光太郎文書 726

五 第十二方面軍参謀　板垣中佐

六 第五十七軍参謀　不破大佐

七 東京防衛軍司令官　藤原中佐

同　参謀長　飯村中將

八 海軍総隊参謀　日笠大佐

千早中佐

荒木光太郎文書 726

目次

第四部第二章　九州及び東京の防禦
一、米軍攻撃計畫に對する判斷
全般計畫
九州攻撃計畫
關東攻撃計畫
二、一九四五年[illegible]年に於ける大本營の本土戰米作戰指導
作戰準備の重點を九州に移行す
水際撃滅思想の再認識
戰略事内追攻撃戰法の研究
三、九州防衛作戰
航空作戰の計畫
海上作戰の計畫
勝算を何處に求めたか
地上決戰の計畫
四、關東防禦作戰
航空作戰の計畫
海上作戰の計畫
地上作戰の計畫
五、東京防禦
東京防衛軍の編成
東京防衛の計畫

第二章　九洲及關東作戰

米軍攻撃計畫に關する判斷

上述の米軍戰略判斷に基いて米軍の攻撃計畫は次の様に判斷せられた。

◎全般計畫(1)

（註(1)）本土作戰記錄（第一總宣、第二總宣）大本營第二部長有末中將回想

1. 目的

米軍の本土上陸攻撃の目的は九州方面に對しては海空軍の大作戰基地を獲得して關東大決戰を準備し、關東方面に對しては日本軍主力を殲滅して日本の中樞、東京要域を占領し日本の死命を制するのに在ると思はれる。そして關東決戰完成後日本が依然抗戰を繼續する時は掃蕩を目的とする作戰に移るであらう。

2. 時機、順序、兵力

其の攻撃の時機、順序、兵力は俄に斷定し難いが既述の戰略判斷に從へば本年秋、十五箇師團内外を以て先づ九州に來攻し次で關東地方に來攻する筆が多い。其の際關東方面に指向する兵力は三〇箇師團以上となり時機は明年春と予想される。直路關東に來攻する時は本年晩秋以降となり使用兵力は矢張り三〇箇師團内外に達するであらう。

關東と九州とを同時に攻撃することは先づ有り得ない。(2)

尚九州だけを攻撃し日本の屈服を計る場合も考へられる。

（註(2)）註(1)で述べた樣に兵力輸送並に補給の爲一時的に動員出來る船腹の現勢から米軍可動兵力量は本年末三〇箇師團内外來年春五〇箇師團内外に制限せられる。從つて九州及び關東に同時に作戰する事は使用兵力の万全を期し難く且海空軍の協力が不徹底となる。

而も先づ中支沿岸、濟州島、若は南西諸島、伊豆

諸島等に作戦する場合は一〇箇師団乃至三箇師団内外の兵力を必要とする。

次で關東方面に對する米軍使用兵力量は前記可動兵力と同方面日本軍總兵力（他方面より導入予定の地上師團一〇箇を含み約三〇箇師團）に相當する兵力を指向するものと推定した。此の様に關東方面所要兵力と九州方面日本軍總兵力（他方面から導入予定の地上師團を含み一七、（八）箇師團）とを比較し更に地勢、作戦目的から觀て米軍が九州方面に指向する兵力は大体一五箇師團と推定された。

又九州作戦の時機は對日早期終戦、同方面基地を利用して行ふ關東作戦の準備と前記兵力、船腹の檢討等から颱風季節後即ち九月末以降の秋と判斷

3. 地域作戦

九州東部の場合には其の地域を南部九州だけに止め(9)更に作戦を容易にする爲西部南部地區にも一部の作戦(a)を實施する可能性が多い。

又時には北は九州を攻撃する事も考へられるが其の時機は南部九州の攻撃時機よりも遅延するであらう。

關東方面に於ては其の作戦目的から觀て東京の攻略を重視し又日本陸軍主力決戦作戦の必要上長く關東地方全域に亘り更に一部は關東地方以外に及ぶと思はれる。

（註(8)）此の地域は治鹿、鹿屋、都城、新田原等の大飛行場群が在る外鹿児島灣、有明灣（志布志灣）等の大艦船基地も在る。又地勢上、九州の末端地であつて日本軍の兵力活動が困難なのに反して米軍は近く沖縄の基地が在り戦闘機の直接支援、小型

（参謀本部情報部長有末中將談）

船舶の利用に便である種ヶ島を占拠すれば其の後は頗に多くなる（第五十七軍作戦主任参謀藤原中佐談）

（註(4)）土佐平地と宿毛湾地区と予想して居た（第二総軍参謀藤原中佐同談）

（註(5)）此の地域は西部日本の工業中枢である許りで無く朝鮮海峡及び瀬戸内海の要を成して居る又博多湾及び関門の艦船基地と福岡周辺に軍隊の飛行場群がある但し済州島、五島、對島、壹岐諸島の重要な日本軍海空基地に掩護せられて居る（同）

一般要領

攻撃の一般要領は何れの場合でも先づ米、海空軍の全力を挙げて本土の完全封殺、日本航空戦力の撃滅、本土内交通網の破壊を主目的として上陸前一ヶ月以上に亘つて戦略爆撃を実施する。次で上陸直前一部に引き続いて依然此の戦略爆撃は継続されつゝ主力を以つては上陸方面の責任に亘る戦術攻撃を実施されるであらう。其の攻撃は軍事施設、交通通信網等の徹底的破壊を目標とし此の間に上陸方面を欺瞞する為他方面に対し一時海空軍の陽攻を実施することも考へられる。

斯うして海空軍の攻撃成果が確信せられる頃遂攻基地に在る米上陸軍部隊は一部海軍護衛の下に本土に向つて発航する。

上陸時機の切迫に伴つて米海空軍の猛爆撃は我が海空基地の制圧、上陸正面障碍の破壊、日本軍の兵力機動を封鎖する交通破壊等を重点とする攻撃と上陸正面海域の掃海を最高潮に実施する。

此の海空軍の攻撃に関切して上陸正面に構成される米海空軍の砲爆撃の増強に掩護せられつゝ米上陸軍は本土日本軍の頑烈な反撃を考慮し従来の島嶼作戦に比

して一段と第一次の上陸兵力を強大にし又第一日より砲兵、戦車を主体とする大部隊を揚陸する。而も迅速に橋頭堡を固め當初は重質に是を撃滅する。揚陸渉し上陸兵力が勝算を確信し得るだけになれば断乎攻勢に轉移する。此の間米海空軍は上陸正面の敵術攻撃を行つて上陸軍を支援する。其の攻撃の重點は戦場日本軍部隊に指向せられるであろう。

尚米上陸軍は海岸からの上陸攻撃の外空挺部隊を以て空からの攻撃を計畫する筆が極めて多い。其の攻撃は上陸正面後方地区の日本軍航空基地を占領して上陸軍主力の作戦に策應するのを目的とするであろう。又日本官兵及將兵の戦意を喪失せしむる爲の各種の宣傳も行なわれよう。

5. 進攻基地(イ)

米海、空、陸軍の進攻基地は次の通りである

米海軍　主力―「ウルシイ」又は「レイテ」　一部―「マニラ」沖縄

七

米空軍　―「マーシャル」沖縄、硫黄島、今後進出すべき基地

米上陸軍　沖縄、比島、其の他中部太平洋の基地

（註(ロ)）此の戦略、戦術奏撃に依つて我が航空基地は巧妙に秘匿せられたものの以外は破壊し尽される。又本土は九州、四国、本州、北海道と夫々孤立する丈でなく是等の内部に於ても寸断され戦場方面の交通は不通となり著明な道路は壹間の交通が困難となる事を豫期した

（第五十七作戦主任參謀瀬原中佐）

（註(ハ)）爆撃部隊編成に就ては第二復員局回答

八

◎九州攻撃計畫（附図第一參照）(C)

(A) 南部九州攻撃

南部九州に對する米軍攻撃の目的は空海基地の占領にあるが日本陸軍の健在する本土の攻撃であるから決戦的用意を以て攻撃する

であらう。

作戦一般の方針は當面の日本軍を撃滅し速かに馬來半島以南の地域に於ける重要航空基地を占領するのである。

先んじ海ケ島を攻略し敵艦隊の基地の攻撃正面は南部海正面と宮崎平地若くは蘭印半島西岸正面何れかの一正面とに指向する。三正面相併行して上陸する筈は多いであらう。三正面は共に大航空基地があるが其の中南海正面に主力を指向する筈が大である。各正面の主上陸地点は南海灣正面では志布志湾、宮崎平地正面では住吉海岸、蘭印半島正面では吹上濱と予想する。

各正面上陸の時機的順序の判断は結局に到達したかつたが此の三正面が海軍上夫々隔絶して居るのを利用して日本軍を分散拘束し主力の作戦を容易にする為先づ宮崎平地若は蘭印半島の正面を攻撃し次で南海正面に主力の上陸を開始するであらう。

又一部を以て鹿兒島灣口を突破し主力の作戦に実際せしむるであらう。尚上陸軍の攻撃に就て敵機動部隊若は都城周邊飛行場等に對し空挺兵団を降下し攻撃する筈が大である。其れは戦闘機の滑地を推進する外兵力を空輸し一挙に都城附近の戦略中枢地域の占領を目的とするであらう。

又四國の航空基地より米上陸軍の船團を攻撃する日本軍攻勢の活動を封殺し瀬戸内海周邊諸港を完全に制抑する目的を以て一部を以て南部四國港に上陸平地を攻撃する筈が多い。

米軍が十五箇師團内外を使用する場合攻撃兵力部署に関する判断は次の通りである。

有明灣正面に約六箇師團、宮崎平地若は蘭印半島西岸正面に約三箇師團、四國正面に約二箇師團、空挺師團一乃至二箇師團、戦略予備約二乃至三箇師團と推算する。

又第一次の上陸兵力は日本軍の反撃に備へて強大なものと思はれ

その兵力は主力方面に於ては三個師団、其の他の正面に於ても二個師団内外に達するであらう。

各正面上陸軍の任務に関する判断は次の通りである。

有明海正面上陸部隊は鹿屋地区及鹿児島湾岸沿で都城平地を占領し一部を以て肥薩国境を扼する。宮崎平地上陸部隊は宮崎平地を占領し一部を以て肥薩国境を扼する。

都城平地に侵進せしめ有明海方面に上陸する主力の進出を容易にする。

宮崎平地上陸部隊は宮崎平地を占領し一部を以て肥薩国境を扼する。

(B) 北部九州攻撃

北部九州に對する米軍の攻撃は南部九州攻撃に比し更に決戦的用意が強いものと判断される。部隊其の一般方針は主力を福岡地区沿岸に又各々有力な一部を以て博多湾及関門方面に上陸し先づ北部九州一帯並に本州方面より増援する日本軍を撃滅した後関門地区、博多平地、久留米平地一帯を占領するであらう。

此の間一部を深く久留米平地に突進させて南部九州方面からの日本軍の兵力補給を阻止するであらう。

又本作戦前に筑州島若は五島列島壹岐の制圧を計るものと思はれる。

攻撃の一般要領は南部九州攻撃に準ずる。

(註(3)) 本土作戦記録(第二総軍)、第五十七軍参謀瀬原中佐同盟

(註(3)) 第十六方面軍司令部に於ては一九四五年五月頃迄は米軍の主攻撃方面を宮崎平地の方面に予想して居た。一九四五年四月末第十六方面軍司令部が曾て立した作戦会議は此の判断を基礎として宮崎平地の決戦を研究したが同年六月に入つて此の判断は或められた。部も米軍の主攻撃方面を有明湾正面と判断した。其の理由は此の正面は鹿江地区の良好な

飛行機隊の外に有明湾及び高見島湾の艦船基地を包含し而も南九州の敵者中枢地域への突進が容易だと謂ふのである。

（第五十七軍參謀原中佐回想）

（註(10)）日本軍部は南方に於ては四國の土佐平野を日本の「レイテ」と呼んで其れは「レイテ」と同様米軍が瀬戸内海と四國内の脊梁山系に依りの進撃に使つて瀬戸内の攻撃に回された小さな平地と謂ふ意味である。（第五十七軍參謀原中佐回想）

◎四國東攻撃計畫(11)

四國東攻撃の一般方針は南方面日本軍主力に決戦を再興して是を撃滅すると共に迅速な東京占領を目的として攻撃する。尚此の攻撃前に大島、御前崎或は富山湾迂を攻略し戦闘機基地を推進するとともに考へられる。其の攻撃正面は九十九里濱正面及相模湾正面を重視し相併行して攻撃する筆が大である。

尚高島湾正面をも攻撃する筆がある。(12)

を指向するであらう。其の中九十九里濱正面に主力を主上陸地区は九十九里濱、正面に於ては東金地区、相模湾正面に於ては相模川左岸地区、高島湾に於ては久慈川、右岸若は鹿島地区と予想する。

各正面上陸の時期は原則は同時に行するが先づ九十九里濱正面に上陸し次で他の正面に上陸することもある。

九十九里濱正面からの上陸攻撃に当つては利根川及び霞ケ浦を利用し迅速攻撃を併用するであらう。

又一部を以て東京湾口を突破し主力の作戦に策應することが考へられ八街、厚木附近飛行場に對して空挺隊を推進する筆もある。

米軍が三〇箇師団内外を使用する場合此の攻撃の兵力部署に關する判断は次の通りである。

荒木光太郎文書 726

大島、御前崎、若は熱海等の敵を企圖する場合は二乃至三箇師團一〇箇師團、相模灣正面約七箇師團、鹿島灘正面約三箇師團、空挺兵一乃至二箇師團、爾余は戰略予備と指定せられ其の上陸は數次に亘つて實施するであらう。其の時間的間隔は二週間乃至三週間とならう。(四)

第一次上陸兵力は九十九里濱及相模灣正面共に五箇師團内外に達するものと判斷される。

各正面上陸軍の任務に關する判斷は次の通りである。即ち九十九里濱上陸部隊は先づ當面の日本軍を撃破し次で東京東方地區に突進し主力を以て東京都を攻撃すると共に一部を以て利根川南方地區一帯の日本軍を掃蕩する。相模灣上陸部隊は先づ當面の日本軍を撃破し夫々有力な一部を以て横濱及び三浦半島を攻撃し主力を以て東京西方地區に突進し東京を攻撃す。

尚一部を以て東海道及甲州街道を拔し東海岸は甲府地區より關東に

向ふ日本軍の背後を拔し、西部關東地區の日本軍を掃蕩する。鹿島灘上陸部隊は當面の日本軍を撃破し利根川左岸地區に突進し關東地區日本軍の連絡遮斷を實施する外、北部關東地區の掃蕩及び東北、北陸方面より關東に向ふ日本軍の背後遮止に任ずる。

(註(四)) 本土作戰記錄(第一總軍)大本營作戰參謀原中佐、第二總軍並に第十二方面軍作戰主任參謀不破大佐談

(註(五)) 九十九里濱正面に米軍の主攻撃を予想した主な理由は上陸作戰と東京地區への進撃が容易な事であつた、相模灣正面は戰略的には東京への進撃に有利であるが上陸作戰に不利である點が指摘された其の點は海岸に近く要塞が發達して居て日本軍の抵抗に依てあるとと、大島初め東京灣口諸要塞の妨害を受けることであつた。

荒木光太郎文書 726

〔大本營陸軍部課原中佐談〕

〔註釋〕第一次上陸用船團を基地に折返へし第二次の上陸に使用するものと推定し其の往復所要日數（積搭所要日數六日を合む）は比島基地の場合は三週間、沖縄基地の場合は一三日を要し（「通報第一〇二六號」防衛總司令部術に關する第一復員省の回答

一九四五年夏季に於ける大本營の本土對米作戰指導

一九四五年夏季に於ける大本營の作戰指導は次の三點を重點として指導せられた。

◎九州に作戰準備の重點の移行

一九四五年六月沖縄作戰に於ける戰が終焉する頃、米空軍活動の重點が西部日本方面に移行した。即ち中小都市燒夷の外、瀬戸内海、九州、中國の日本海諸港灣に對する機雷攻撃が頻に執拗となつた。又四國、九州沿岸に對する偵察と思はれる米機の活動が頻繁となり南九州沿岸地區と鐵道に對する米機の攻撃が活潑となつた。[14] 是等の光候から觀て大本營は、米軍の本土進攻方向は先づ九州、四國方面に向ふ可能性が増したと判斷した。之に基いて作戰準備の重點は逐次九州、四國方面に移行する樣に指導せられた。[15] 即ち部上戰備に關しての九州、四國方面新編成兵團の裝備充足時期を繰上げ重需品の補給、輸送、集積を優先實施した。航空戰備に關しては航空戰力の

配置を逐次西日本に移行する樣に指導された[16]

次で七月中旬大本營は九州及朝鮮海峽方面の作戰を主眼として「沈號航空作戰に關する陸海軍中央協定」を決定した。其の主旨は米上陸軍を上陸直前輸送船共に撃滅しようと企圖ふのである是が爲に航空攻撃は米輸送船の攻撃に徹底し全機特攻戰法を以て泊地進入前後に戰術的強襲を加へるのを方針とするものであつた。大本營陸海軍部は夫々航空總軍司令官及海軍總隊司令長官に對し本協定に準據し航空作戰を實施すべき命令を下達した。[17] 其の電子は次の通りである。

（註[16]）此頃の九州方面に對する米機の活動は次の樣であつた

（資料―米機の活動狀況挿入す―）

〔註(15)〕當時大本營や西部日本上級司令部の首腦は日本軍が九州作戦に成功したならば關東地方の決戦は避け得られるかも知れない。假令同避し得なくとも關東決戦の時機を遷延し得るであらう而も此の間戦爭を比較的有利に終末に導く「チャンス」を捕捉し得るかもしれないとの希望を抱いて居た。

〔註(16)〕大本營陸軍部記録、本土作戦記録（第二線軍）

〔註(17)〕本土航空作戦記録（航空総軍）、大本營海軍部作戦記録

〔註(18)〕一九四五年七月十三日附大海指第五二六號、本土航空作戦記録（航空総軍）

〔註(19)〕一決號航空作戦に關する海軍中央協定」（GE

Q 接收文書

陸海軍中央協定の骨子

(A) 方針

陸海軍全航空戦力を統合して所有の全期間に之を洋上に撃滅する。

又本土の防空及海水路に対する作戦を強化する。

(B) 作戦指導の大綱

(1) 米上陸軍に対する作戦指導

主として特攻攻撃戦法を以て米軍上陸船團を撃滅する。之が爲先づ九州、四國、南鮮に作戦準備の重點を指向し之を成する事の後ち之を増強すると共に他の方面特に關東地方の作戦準備を進めると。米軍上陸企圖を早期に看破する爲米軍の逆攻撃並に其の作戦要領に對する索敵を周密に實施する。

米軍上陸船團に對する攻撃は沖縄十日間程度の期間内に船

圍の泊地進入前後に最大戦力を投入し壮烈に亘り果敢、執拗なる奇襲、強襲を反覆し其の撃滅に努める。米機動部隊に対しては好機を捉へ攻撃し米上陸船団に対する有效なる支援を阻止する。

地上作戦協力は第二義とし當時の戦力之を許せば一部の兵力を以て上陸前後に上陸軍の支援砲撃に任ずる米艦艇を攻撃する。

(2) 決號作戦生起迄の防空及潜水艦に對する作戦要領

陸軍は其の航空戦力を統合し本土に對する米空軍に其の大型機に對し迎撃作戦を實施する。

海軍は之に協力する

陸海空軍協力して米空軍大型機の重要基地等に「マリヤナ」硫黄島及沖縄方面の基地を奇襲する。

海軍は日本海方面の米潜水艦に對する作戦を強化し米潜水艦

の進入阻止と補給に努める。

陸海空軍協力して本土主要港湾に對する米空軍の機雷封鎖企圖を制壓する如く努力する。

(C) 兵力配備並運用計畫の大綱

前記計畫に基く兵力配備と其の運用の大綱は次表の通である

陸軍航空兵力配置並運用計畫　別表其の一

海軍航空兵力配置並運用計畫　別表其の二

別表其の一

陸軍航空兵力配置と其の運用計畫

備考　本表兵力以外に七、八月間に特攻機五〇〇機乃至一〇〇〇機整備の豫定であつた

別表其の二

海軍航空兵力の配置と運用計畫

備考　決戰に當つては5AF長官が決戰方面全航空部隊を指揮する豫定であつた。